

回帰抄

福井爽人・福井時子日本画展

兄と妹、二人のまなざしが織りなす静謐な世界

福井爽人と福井時子は、ともに東京藝術大学日本画科に学び、岩橋英遠、のちに平山郁夫に師事し、日本美術院を舞台に画業を切り拓いた北海道出身の日本画家です。兄妹は五人家族で昭和二十九年までの多感な時期を小樽市で過ごしました。父は北海道庁立小樽中学校の英語教師であり、同僚の美術教師に子どもたちの指導を依頼。爽人は中学校美術部で画集や顧問の影響から、画家を志すようになりました。

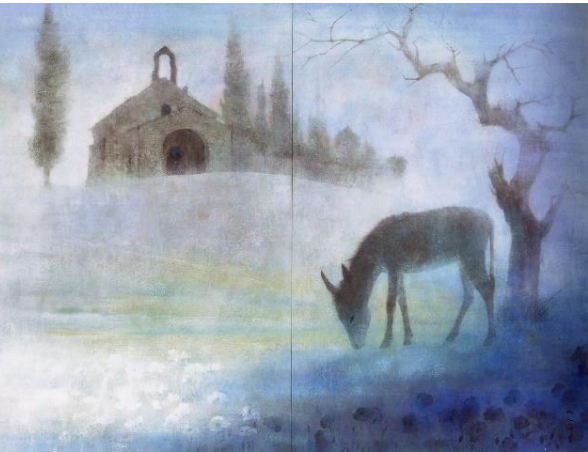
その後、父の転勤にともない一家は東京へ移住。爽人は日本大学芸術学部、時子は都立駒場高等学校芸術科に進学し制作に励みます。進路に迷う兄を平山郁夫へと結びつけたのは時子でした。平山は「これからは内弟子より大学で学ぶ時代」と助言し、爽人と時子は、東京藝術大学日本画科に入学、同じ学び舎で青春を過ごすこととなります。

爽人は従来の院展にはない清新な画風で頭角を現し、数々の受賞を経て同人に推挙され、次世代を担う日本画家として期待を集めました。のちに東京藝術大学教授に就任し、インドや中国への取材を重ねて画境を深め、壮大なロマンに満ちた画風を確立します。

時子もまた院展で奨励賞を受け、特待に推挙されました。花や鳥、草木や小動物を描き出す清らかな夢の世界に独自の個性を示し、外務省による作品買上の栄誉にも輝きました。さらに田地文子の著作『砧』『夢うつつの記』（文藝春秋）の装幀を手がけるなど、創作の幅を広げています。

本展は、福井爽人と福井時子がともに感性を培った小樽の地で開催される、初めての兄妹二人展です。時子は小樽での展覧を心待ちにしながら令和六年、逝去しました。兄妹はそれぞれ異なる理想を追い求めながらも、育った環境と同門ゆえの色彩感覚や抒情性、装飾性に共通点が見られます。

東京で花開いた二人の絵筆が、妹の逝去を機に故郷・小樽で響きあう——本展は、兄妹の絵画による対話であり競演です。



福井爽人 儂 平成 20 年



福井家の人々（北大植物園にて）
右から母千工、父貞一、長男爽人、次女時子



福井爽人 想像 昭和 49 年



福井時子 朝 昭和 61 年



福井時子 草深野 昭和 54 年



福井爽人 孔雀 昭和 41 年



福井時子 ひまわりと緑の窓
昭和 38 年

【関連事業】

- ①アーティストトーク
「小樽から出発した私と妹のあゆみ」
出演／福井爽人（本展出品品日本画家）
聞き手／伴野昭人（北海道新聞社編集局文化部長編集委員）
日時／四月二十五日（土）午後二時～三時半
定員／五十名様 会場／特別展示室内
- ②朗読とギターのひととき
「福井爽人のエッセイと詩／宮沢賢治 永訣の朝」
出演／堀きよ美（女優）
竹形貴之（ギタリスト）
日時／六月十四日（日）午後二時～三時半
定員／五十名様 会場／特別展示室内

関連事業のお申込み：事前予約制
tel 0134-34-0035

※観覧券が必要です。お席に限りがございます。

| | | |
|---------------|------|-----------|
| JR函館本線 | | 小樽駅 |
| ●小樽経済センター | | |
| ●産業会館 | ●長崎屋 | ●サンビルスクエア |
| 都通り | | |
| ●オーセントホテル小樽 | | |
| ●金融資料館（旧日本銀行） | | ●市立小樽美術館 |
| | | ●郵便局本局 |
| | | ●小樽芸術村 |
| | | 小樽運河 |
| | | 旧手宮線 |



市立小樽美術館

〒047-0031 小樽市色内1丁目9番5号 tel 0134-34-0035

展覧会イベント詳細
小樽美術館協力会
ホームページへ

